

「袖珍辞書」の新時代

馬 本 勉

かつて同僚の哲学教師から、「変なもの集めてない?」と尋ねられたことがある。「古い *POD* を集めているよ」と答えたら、「そうだろう!」と喜んでくれた。彼はある女性の同僚に「男のロマン」を語っていたのだ。

変なものを集めるのが男のロマンかどうか知らないが、*POD* (*The Pocket Oxford Dictionary of Current English*) には何とも言えない魅力が詰まっている。いまだに上手く引きこなせないが、第 5 版(1969)までに見られる、その言葉を使う人々の気持に寄り添うような定義が好きだ。例えば *pocket* の定義には、ただ物を入れるだけでなく、“for keeping hands warm”といった面も記されている。

福原麟太郎は「辞書の話」(『新英語教育講座』6 巻、研究社、1959) の中で *POD* の引き方を紹介するとともに、大正時代に発達した日本の小型英語辞典に言及している。「語数も内容も大辞典になるべく負けないというやり方で、こんなのは西洋にも無い」と。小型辞典の代表は『コンサイス英和辞典』(三省堂)だろう。初版は 1922(大正 11)年出版の神田乃武・金沢久(編)『袖珍コンサイス英和辞典』とされる(が、その前身として同編者による『袖珍英和辞典』(1917)がある)。そのほかにも、早川勇『日本英語辞書年表』(1998)によると、明治から大正にかけて多くの携帯用小型辞書、いわゆる「袖珍辞書」が発行されていることが分かる¹⁾。本紀要の論考で触れた世良壽男氏の蔵書の中にも、豊田千速(訳)『ダイヤモンド英和辞典』(武田福蔵ほか、1888)や、イーストレキほか『英和新辞林』(三省堂、1894)が含まれている²⁾。これらは書名に「袖珍」こそないが、縦横は名刺を少し大きくした程度だ。ただしポケットに入れるにはいささか厚い、といったところか。

POD の 5 版が出たとき、鶴澤伸雄は「厚みがありすぎて、レインコートのポケットならとも角、上着のポケットなどには、とうてい入らない」と述べた(『英語辞書の周辺』三省堂、1983)。内容が気に入っても、持ち歩くにはサイズも重要だ。とりあえず机の周囲を眺めると、須貝清一ほか『語源本位英和辞典』(積善館、1916)、「N.E.D. をポケットに」が合言葉の島村盛助ほか『岩波英和辞典』(岩波書店、1936)、*POD* を意識した岩崎民平(編)『ポケット英和辞典』(研究社、1947)などの「ポケット版」に目がとまる。だがいずれもポケットには入りそうにない。かろうじて大丈夫なのは、熊本謙二郎・南日恒太郎(編)『袖珍英和辞典』(有朋堂、1914)くらいだろうか。

だが、もしポケットに入る 1 冊が見つかったとしても、本当に 1 冊で大丈夫か。例文が無い、語数が足りないなど、小型を選んだくせに、つい無茶な要求をしたくなるものだ。

ところが最近、この悩みは解消した。現代の袖珍辞書、電子辞書のお陰である。

電子辞書は 1979 年に誕生し、「電訳機」と呼ばれた。1990 年代には書籍版の文字情報を全て盛り込んだ「フルコンテンツ」の機種が登場し、2000 年代に入って検索機能が充実する。昨年からは英和大辞典搭載型が急増し、今年になって和英大辞典の搭載機や、英和大辞典の訳語から見出し語を逆に検索する機能が加わるなど、急成長を遂げている。今や、紙の辞書よりも先に、電子辞書版の改訂が行なわれる時代だ。

そこで早速新しい機種を導入した。英和と和英、コロケーション、英英、シソーラス、文法・語法書、それに国語辞典、漢字辞典、百科事典まで入っている。それぞれがかなりの語数を誇る辞典であり、これ 1 台でほとんどの仕事はできてしまう。乾電池入りで少々重いが、ポケットに入れて持ち歩くことができる。それが嬉しい。

小型軽量で内容が豊富、というだけが電子辞書の魅力ではない。紙の辞書では考えられないことが実現可能となった。その一つが検索機能を駆使した「ジャンプ」。例えば **pocket** という語を英和で引く。画面には見出し語、発音、語源、訳語、語法注記が並ぶ。ボタン一つで例文や成句の一覧も。そしてここからが電子辞書の腕の見せ所だ。他の辞書の見出し語 **pocket** へ容易にジャンプできるのだ。英和を見たら次は英英へ。英語の定義を読みながら分からない語に出会ったら、該当の語から英和へ飛んで、また戻ってくればよい。訳語から和英や国語辞典、百科事典へ飛ぶこともできる。**pocket** を含む例文をいくつも集めて表示してくれるのも強みだ。別の見出し語の下にあらうが、他の辞書にあらうが、とにかく **pocket** を含む例をたちどころに検索してくれる。用例を眺めていて、お金に関わるものが多いな、ということに改めて気づく。

いくつもの辞典を目の前に置いて、頭を使いながらあれこれ引き比べするのに似ている。先人たちは辞書を読むことを大切にした。連想の糸を頼りに次々と、別の項目へ、あるいは他の辞典へと、ページを繰りつつ目を走らせる。知らず知らずのうちに語感が膨らむ。これと同じようなことを、電子辞書は 1 台でやってのけるのだ。

もちろん、問題がないわけではない。各社から次々に出される電子辞書だが、搭載辞典の種類が特定のものに限られ、「独占」の状態に近い。歴史的に見ると、様々な辞典がしのぎを削りながら日本の辞書界を支えてきただけに、今のこの独占状態は気になる。味のある辞典が紙版の衰退と共に姿を消してしまうのではないかと心配だ。また、ユーザーの増加に伴い、適切な電子辞書指導が必要だとの声も強い。英語教育関係の学会では、その指導法や効果をめぐる研究発表の数が急増している。

この平成版「袖珍辞書」のブームは当分続くだろう。ポケットに入れてどこへでも持ち運び、多様な機能を楽しみながら、電子辞書の動向を見守っていきたい。

注

- 1) 最初に「袖珍」を冠した辞書は堀達之助(編)『英和对訳袖珍辞書』(洋書調所、1862)。現存する内の一冊は、昨年の高知例会時に牧野文庫で閲覧した。名前こそ「袖珍」だが、実際は枕辞書と呼ばれるほどの厚みがあり、とてもポケットには収まらない。
- 2) 世良家文書は、このほど口和町から広島県立文書館へ移管されることとなった。保管上の安心と、利用上の便宜が得られたことを喜ぶたい。(県立広島大学)